

作庭実習「森をつくる」12

環境共生園について (5)

岩村 伸一¹⁾

Seminar in Garden Design “Creating a Forest” 12 : “Kyoseien” Garden (5)

Shinichi IWAMURA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組みます。ここでは、その2011年度の環境教育実践センター環境共生園における造園作業を報告するとともに、それにまつわる記憶のことなどを述べています。

キーワード：庭，森，環境共生園，記憶，シーニュ，「それ」

環境共生園の北端にいます。11月中頃の晴れた夕刻，西からの陽を受けて辺り一面明るい印象に感じられます。しばらく来ないうちにいつの間にか秋も深まっている。環境共生園で行う今年の実習のため，下見に来たのでした。

中央部にある池へ北から流れ込む小流れの上流部，いかにも古くからそこにあったように見える，苔むした石組みの上に立ちました。流れの両脇の石に挟まれて，水流をせき止めているかのようなこの石が，2000年度の実習でこの場所に最初に据えられた石です。ということは，共生園にたくさん散らばっている景石の第1号で，実際はその年その年の作業の都合で据えられているのだけれど，大きな目で見れば，すべての石はこの石との関係の上にあるということになります。この足下にある石が10数年前に据えられたものとは思えません。こんなにこの場になじみ，いかにも自然に見えようとは，制作当時は予想していませんでした。石組みのその時の写真は，環境教育研究年報11号（2003.3）掲載の『作庭実習「森をつくる」1石を据える』に，作業中と樹木定植後の2枚がカラーで載っています。写真に写っているその場所が今わたしが立っているここであるということに感慨を覚えます。取り組んできた「森をつくる」ということをこのことが示しているように感じます。その年度の実習は，地中に埋められていた大量の廃棄物に悩まされ，その処理に追われて，授業期間の最後になってやっと作庭らしくなりました。終盤に，購入した土で地形を整え，石組みを施し，樹木を定植して整地するとい

1) 京都教育大学

う慌ただしい作業経過だったのを思い起こします。それでも、そのときに瀬戸内寂聴氏邸の庭改修現場から移植したアラカシやクロマツ等の木々や、『ふれあい教室』の仲間たちに植えてもらったコナラ、ミズナラ、クヌギ、ヤマモミジ等の苗が、いくつか枯れはしたものの大きく育って枝葉を広げ、この石組みの辺りを覆い、木陰をつくっているのです。おかげで光がさえぎられ、ここ数年はこの周辺では下草もあまり茂らなくなり、草刈りがかなり楽になっています。10 数年をかけて、やっとひとつの森林の姿を感じさせるようになったと思います。おかげで、昨年導入したばかりの「陸軍第十六師団輜重部隊遺跡」もすっかり馴染んで、昔からここにあった門であるかのように見えるのは、ちょっとした驚きでした。

木をひとつひとつ見上げながら林の間に入っていくと、足下の落ち葉がかき集められ何か所か山ができての気づきました。おそらく、良かれと思った誰かが掃除に取りかかったのでしょう。路上の落ち葉はゴミとして掃除の対象とされる世の中であることは承知してはいますが、この場合はちょっと違います。ここは森の中であるべきです。街なかのルール適用は極力避けることにしたい……。早速、竹の熊手（かつて、わたしが属した庭の現場ではサラエと呼んでいました。）を持ち出して、落ち葉の山の広げもどしに取りかかりました。新しい落ち葉をかき集めはしたものの、通常の庭掃除のようにその下からキレイな土の表面は出てこず、黒く朽ちた枝葉やそれに繁殖した白いカビの層などが表にあらわれ、くわえていろんな虫の類も転げ出、這い出してきたことでしょう。それほど、ここ数年で積もったものは厚く、無理にでも元の土の表面を出してキレイにしようとすると、かなりの腐食した層を取り除かなければなりません。ここにできているいくつかの落ち葉の山は、おそらく途中で諦めてしまった跡のように思われます。街なかのキレイはここでは通用しません。

実は、林の足下に広がる落ち葉の堆積層が重要なのだと考えています。そこで虫やミミズ、それに様々な微生物によって有機物が分解され、吸収可能な養分となって再度木々に利用される。この連鎖が森の存在にとって欠かせないことなのです。これについての詳しい説明は、森林生態学の専門家に任せられた方が無難です。四手井綱英は『土の中の生物』と題した文章において、次のように述べています。

この分解者といわれる生物で、陸上の土に住んでいるものには、種々様々な小動物とキノコ、カビ、バクテリアなどの植物の部類にはいるものがある。この種の水中、土中の植物群が実際には最後の分解をして炭酸ガスと無機塩類に還元しているのである。土壌中の動物群の主な役割は、こういった廃棄有機物の粉碎にあるといわれている。カビやバクテリアがついて腐らせはじめたものを食物として、さらに細かく砕く。有機物質が細分されるほどカビ・バクテリアによる化学反応がしやすくなるのである。地上の生産者・消費者の廃棄物は総括して「リター」と呼ばれ、主に地表に堆積する。地中の分解者の作用により腐り細分化されたリターは腐植という黒褐色の微粉になる。これは雨水とともに地中に浸透する。浸透した腐植はしだいに分解され最後には前記したように炭酸ガスと無機塩類に還元されるほか、土くれの粘結剤になり団粒構造といわれる多孔質な空隙や水もちのよい、すなわち物理的性質のよい表土をもつくる。¹⁾

たしかに、この場所の地面は当時の養護学校から運ばれた工事残土である粘土質の土の上に真砂土（まさつち）と呼ばれる山の砂を乗せて整地したのですが、サラエの先で探ってみるとその表面は元の黄色から少し黒ずんできています。さらに四手井は、

すなわち森林は大気・土という無機的な媒体を通じて生活の必要物質を循環しながら生活を営んでいるので、これを「自己施肥機能」と呼んでいる。²⁾

と述べ、この機能が森林を成立させる重要な要素であるとしています。このことから、環境共生園のこの一帯が森として成り立ち始めていると感じます。

しばらくサラエを使って積み上げられた山を均しもどしながら、枯れ枝や落ち葉を踏むその音の心地よさを楽しんでいました。そのとき、西の雲間からふたたび陽が差して、木漏れ日があかく落ち葉を輝かせました。その眩しさを受けたとたん、想いがけない気分がやってきました。ある感じが体の中に広がり始めるのを感じます。陽を受けた森の情景。吹きだまりの落ち葉の海に体を沈め、目を凝らし眺めています。小さなときによく遊びに行った薊野（あぞうの）の森での記憶でした。それが突然に、生き生きとした印象で思い出されています。現在の身体の内に、子どもであった自分の感覚が走っている……。



現在の小流れ上流部石組み

2011年度の作庭実習には、その作業報告をする前に、記しておかなくてはならないことがあります。それは山内朋樹氏を非常勤講師として迎えたということです。この一連の報告にも度々登場する「山内君」なのですが、現在、京都大学人間・環境学研究科の博士後期課程を指導認定退学し、フランスの作庭家ジル・クレマンについての論文を書いたりしているのです。

同時に、この授業の OB でつくった培土園という作庭グループの代表でもあって、すでに京都教育大学構内のかなりの樹木に関わってもらっています。わたしが大学法人の仕事に携わる必要があって、会議等で授業ができない場合の手当として配当された非常勤講師枠で依頼することができました。若い彼の参加を得たことは、くたびれ始めたわたしには、大変に心強いことでもありますし、また彼の最新の研究成果をこの授業で活用できることに期待がもてます。当然、今回の作業内容にも少なからぬ影響を与えてくれたと思います。

今年の作庭実習は大学藤森キャンパス内での手入れ作業に時間を費やし、環境共生園に舞台を移したのは例年よりも遅い 11 月 17 日でした。庭仕事に不慣れな受講生も少しずつ適応し体が動くようになってからやって来たこととなります。最初はこちら数年と同じ場所、池の底にあたる部分の草引きからはじめたのですが、みるみるうちに完了してしまいました。記録を見返すと 12 月の年の瀬までに共生園で 5 回の授業を行っていますが、その間にかなりの仕事量をこなしているようです。男子の受講生が比較的多かったということもありますが、山内君が加わったことにも理由があると思われまます。

2008 年度の末に環境教育実践センター主催で開催されたシンポジウム『場所から学ぶ一環境教育実践センターをキーステーションとして一』で、この環境共生園の造成に区切りをつけたつもりでいたのですが、それでも 2009 年度、2010 年度も継続して何らかの形でここに手を加えています³⁾。今回共生園に来るのが遅くなったのも、造園に関する事柄はあらかた終わっていると考えていたからでした。が、冒頭で述べた下見に来て、その考えは変わりました。附属高等学校への道に立ち、西を向いて池の左右を見渡してみると、どうも左（南）側がすっきりとしない。池から北側にかけての景観が持っている説得力のようなものを獲得できていない。漠然と土を盛り上げ、起伏をつけてそれらしく整地し、「この辺りを民家の裏山の感じで・・・」などと言いながら作庭してきたのだけれど、なんとなく不満です。現行の地形のままだと降った雨水は多くが南側斜面を伝って流れていきます。すると、その手前につくってある棚田の意味が不明になってしまう。実際はこの段々畑を田として機能させてはいないのだけれど、本来この場所に水田ができるためにはここへ水を供給する流れが存在するはずで。そうでなければ、この地に生活する人がこの場所に棚田をつくるはずはないのです。この景色ができる必然性のある野筋を用意する必要があります。野筋というのは庭の骨格ともいべきもので、専門家の現場でもゆっくり時間をかけて準備されます。それが納得のいくものでなければ、いくら気に入った石や樹木を持ち込んでも、よい庭にはならないものです。その野筋の確定ができていなかったのです。急遽、南側一帯に土を加えることにしました。南端の地面を高くして、水が北に向かう勾配をつくり、田や池へ流れ込む水の流れを想定し、その方向で改善しなくてはなりません。

12 月 1 日に真砂土をトラック 1 台分購入し、共生園南端まで一輪車で運び込み、レーキを使って丁寧にも均して整えました。それでもいくらか地面は上がらず、水は相変わらず南側へ流れるようです。12 月末までに計 12 リューベ（立方メートル）の真砂土を運び込み、地形は改善されつつあります。年度末までにはあとトラック 2 台、全部で 20 リューベほど入れようと考えています。そうすれば、南側一帯も高くなり、水の流れはこの中央に池があるということに無理のないものになるはずで、今あるいくつかの起伏をまとめて、南西奥を高くした、必然

性を感じさせるひとつの野筋になるでしょう。後はそれをバランスのとれた美しいと思える形に整えることです。

もうひとつ、今年の作業報告に「大きな石」を据えたことを追加しておこうと思います。夏の終わり頃、古川氏より電話がありました。彼の庭改修の現場で大きな石が不要になるのだが大学でどうだ、という問い合わせ。一も二も無く「使う」と答えました。数日後、共生園の中央部、道路沿いに、丸いものと四角いもの2つの岩が転がっていました。ともに2トンはあろうかという巨石で、ひとりやふたり、いや3、4人寄っても転がせるようなものではありません。思い返すとずいぶん以前に頼んでおいたはずですが、頼んだ本人も忘れてしまう頃にやって来たということになります。環境共生園で大きい石を使いたいというのは、この計画が立ち上がった頃からの思いでありました。1999年3月に開催されたシンポジウム『環境共生園をキーステーションにして—環境教育を学習から日常活動へ—』でイメージ作りに提出した「森の想定図」にも、大きな石を柵田の上辺に描き込んであります。⁴⁾ この大石を据えるというのは10数年来の念願であったわけです。



丸い石をチェンブロックでつり上げる

12月15日、この丸い方の石を動かすため、久しぶりにチェンブロックを持ち出してきました。これは重いものを持ち上げたり動かしたりするときに古くから用いられてきた、歯車を組み合わせ、チェーンを使ってつり下げたフックを上下させて使う道具です。作庭ではどんな

場所でも設置できるよう、3本の丸太を束ねた三又と組み合わせて使用します。チェーンブロックの使い方を説明すると、①動かしたいものをまたぐように三又の足で三角錐を作る、②3本の丸太が交差する三角錐の頂点にチェーンブロックを取り付ける、③動かしたいものにワイヤーをかけてつり下げられるようにする、④チェーンブロックから出たフックにワイヤーをかける、⑤チェーンを操作してフックを巻き上げ持ち上げる、といった具合です。三又の足先がつくる地面上の三角の中に動かしたいものが入っていればこの装置は機能します。そうでなければ、三角錐は倒れます。大学に用意してあった三又では高さが足りなかったため、古川氏から大きなものを借りました。それからもうひとつ、重い石を移動させるときに使う特別な車(ネコグルマ)も借りてきました。これはプロの現場には不可欠な、木製の頑丈な作りの台車で、先端から突き出た一本の舵で方向を操ります。4本ついた車輪は飛行機用のタイヤだと聞きました。これで動かすことができなかつたらもうお手上げです。あとは機械の力を借りなければなりません。

これらの道具を使って、専門家の指導の下とはいえ、素人集団が大きな石を人力で動かそうというのです。かなりの緊張がその場に張りつめました。が、この緊張感があるからこそでしょう、真剣に取り組む作庭現場では事故は少ないものです。まず、三又の設置です。なれない作業に右往左往。それでも慌てずにひとつひとつ確認しながらスタートしました。今回は、正三角形に広げた3本の足の間隔をあまり広げないようにし、三又の背を高くして使用しました。こうすることで重い石をつり上げ、持ち上げるのに対応できます。ワイヤーをかけた石をつり上げ、その下にネコグルマを入れて、石をゆっくりと降ろし乗せようというわけ。ここで使用したチェーンブロックは1.5トン用だったため、この石に対しては少し非力だったのか、苦戦しました。また、重さに対し車のタイヤに空気が足りず、やり直しもしました。乗せる際、石の重心を車の中心付近に合わせることを肝心です。外れると落下する危険がありますし、前に乗せすぎると重さで舵がとれません。慎重に調整しました。このまま共生園の起伏のある地面の上を移動させることはさすがに無理があると判断し、アスファルトの道の上に行くことにしました。ロープを使って数人がかりで引き、後ろから2人が押します。操舵は古川氏が担当し力の加減を指示しました。20メートルほど進んで止め、そこから敷地内に石を降ろします。今度はチェーンブロックを使わずそのまま転がそうということになりました。全員がネコグルマの片側に回り、力を加えて土の上へ転がせる、なかなかの山場であったようです。一休みの後、再びチェーンブロックと三又を使って少しずつ石の位置をずらせ、予定している場所へ近づけていきます。今度は3本の足先のできる三角形の形を2辺の長い二等辺三角形にし、離れた1本の足を動かしたい石のすぐ後ろに持ってくるようにします。そうして巻き上げると、石が三角形の中心にじりじりと移動してくるというわけです。何度かこれを繰り返し、池の南、棚田の2段目にきて、今日は終了です。ほとんどのメンバーにとっては初めての体験であったのですが、集中した視線で切り開いていくように思いました。道具を片付けた後、転がっている石の周りに集まり、あらためて驚いています。

12月22日にこの石を据えました。場所は石を見たときから決まっています。段々畑2段目の右端、北の角の部分です。池と棚田の間に、池沿いを山側に向かって登る畦道をしつらえてありますが、その道を半分ふさぐように据えます。裾から順番にここまで開墾し田にしてきた

が、ここに来てこの石に当たり、どうしても人力では動かせなかった。昔の田園風景では、田畑に取り残されたこんな石をよく見かけました。場合によっては、農作業の間、かごに入れた赤子をこの石に子守してもらったり・・・そんな想像までが浮かびます。後日、圃場整備と呼ばれる農地の改良事業で重機を使って起伏を均し、効率をねらった直線的な風景に取って代わられていくのですが、その際にこんな石などもじゃまなものとして、いろいろな物語や風情とともに、取り除かれていったのです。だからこそ、そんな記憶をこの環境共生園に据えたかったのです。この石までが人里で、この石からが山だという設定です。いかにもゆったりと座っているという安定感と大きさが求められます。予定した場所に当たりをつけ、適切な穴を掘り、その上でチェーンブロックを使って向きや形を調整し、石の表情をつくります。これ見よがしに奇抜に据えてこの場から浮き上がってもつまらない。いろんな位置や様々な向きを試した後に、いちばん安心できる姿を選択したつもりです。その後、周囲に土を埋め戻し、突き棒を使って数人で石の際を突き固め、最後に土の表面を小さな板切れ（カキイタといいます。）を使って均して整え、完了です。ちょっと当たり前な感じに据えすぎて、小さく見えるようになったのではないかと心配しましたが、遠くから見てもなかなかの存在感で、共生園のヘソのように思われました。

もうひとつの四角い方の石は、年度末までに共生園北側の森の中に適切な場所を探して、目立たないように据えようと考えています。子どもの時に遊んだいくつかの森の中にあつた大きな四角い岩をそのプランの下敷きにしています。



猫車で引く



石を据える

薊野の森に来ています。森の奥にある四角い大きな岩の上に座り込んで、周囲を眺めているのです。中央に立つシイの大木は以前のままに思えるのですが、森の東半分はヒノキの栽培林となっていますし、西側のこの一帯は常緑広葉樹の林ですが、小さく整理された感じがします。この岩に登れば、北に田園の広がりが見渡せたのですが、今はすぐその建物の側面を見るのみです。この12月、個人的な理由で高知へ何度か行くことになりました。久しぶりの高知でした。現在のわたしの実家の最寄り駅は特急だとその手前の後免駅なので、こしばらくこの街には立ち寄ることがなかったのです。用事の合間に時間があって、ふと思い立ってここへ来ました。先日京都にあって、不意にこの森での光景を思い出したのですが、それを確認したかっ

たのかもしれない。少年の時以来久しぶりで、森がどこにあるのかわからない。探しました。それほど町は変わっています。わたしが子どもの頃に走り回った高知駅の裏は、この報告でもこれまで何度かその情景を登場させていますが⁵⁾、駅舎の新築にとまなう開発で既に面影もありません。そればかりか、わたしの少年時代の記憶の中心にある、ゆったり広がる田園の水に満ちた光景はずいぶんと遠いところまで退きました。小学校の帰り道、道草をくいによく登った比島山、小学校の校歌に「比島の森」と歌われていましたが、かなり以前に崩されて無く、跡にはマンションが建っています。おそらくその土がこの辺りの埋め立てに活用されたのでしょう。広い道を備えた均一な空気の住宅街になってしまいました。そんな有様なので、とうとう本屋に入り市街地の地図を購入したほどです。森は薊野駅の北側、当然のことですが以前の場所にありました。やっと探し当てた薊野の森はかろうじて鎮守の森として残っていました。しかしわたしの記憶の内にある、田園のなかに広がる豊かな緑の盛り上がりとしての姿とはずいぶん違ったものになっています。押し寄せた住宅群に周囲を取り囲まれ、この狭い一画に押し込められて、首を締め上げられているように見えました。

体が冷たさを覚えるまで岩の上にあったのですが、結局、何の感慨も得ることはありませんでした。ここがその実際の場所であるにもかかわらず、環境共生園で感じたあのわくわくするような生き生きとした感覚はやってはきません。子どもが遊んでいた跡のようなものはあるのですが、過去のものとして捨て去られている感じで、荒れた印象は拭えません。潜って遊んだ落ち葉の吹きだまりは、南側にある神社の境内から集められたゴミを捨てる所になっていました。

あきらめ、岩から降りて、森を出ました。神社は社殿の新築を完了し、正月に向けた準備を始めたところのようです。掲示物によると掛川神社という名前で、土佐の藩主となった山内家が父祖の地、遠州を思い祭ったといういわれを持つようです。わたしの記憶にあるこの神社は、荒れた廃墟であって、森の背景にすぎません。子どものときのこの森には、まわりいたるところから入れたこともあって、神社があることなど重要なことではなかったのです。落ち着かない思いで石段を下っていきました。おぼつかない足下に 50 年の歳月が思われました。この時からたどれば、あの感覚は既に失われて久しい。思い出は思い出の時間の中にあって、そこでのみ芳香を放つのです。すると、共生園での瞬間は何だったのだろうか。あのとき、記憶の内にある時間が、ここはだいぶ離れたあの場所に現れていたのです。

わたしの小さいときは市街化していない街の周辺部で育ったこともあり、その記憶の端々には、水田や蓮田やそれを取りまく小川や沼の、水を反射する水面の印象が強く刻まれています。小学生になると行動範囲は少し広がり、その湿地を通り抜けて、点在するいくつかの森へ足繁く通ったものでした。中学生になってもそれはやむことはなく、ことあるごとに惹きつけられるようにして、森をめざしています。もはや、そこに行き何をすることというも特にはないのです。ただじっとしてひとりの時間を過ごすことが重要なことだったと思います。子どもには子どもなりの日々の暮らしがあり、それなりに重かったり苦しかったりするのですが、気持ちが塞がれたりしたときは、そこでの静かな時間に、ニュートラルな心の状態にリセットされることを願って、闇雲にめざしたのかもしれない。それとも、何かを探し求めていたのではし

うか。

あるとき、そこで、わたしはある感じに出会います。そのときを文章に残すことは当時の自分にはとても難しいことでした。だから、これまで何度も文章にしようとしてきたのですが、ここでは後日に記した文章の一つを、少し長いですが、そのまま書き写します。

少し高くなった土手の斜面の草むらに身をひそめ、蓮田を前にしています。風がなく鏡のようになった水面は、眩しい光を送ってくる。澱んだ泥の上に、腹ビレでゆっくりと線を引くように、大きなウナギが移動していくのを、息をのんで見つめました。わたしが育ったのは、高知市の外れ、街が途切れ、急に沼地に変わるようなところでした。いくつかの川の流れの間に、水田や蓮根畑が連なっている。現在のように、セメントの水路で水をコントロールすることがなかったためか、川と田、それにその間にあった葦原、沼や池には水が溢れていた。土と水が、今よりもっと近く、植物や生き物もそれらと一緒にあって、絡まりあっているように思えました。陽が上にあって明るい間は、子どもたちの楽園です。陽が落ちはじめると急に心細くなる。恐ろしくさえあった。それでも、毎日のようにそこへ通ったのでした。15、6才になると、さすがにそこで遊ぶことはなくなったけれど、そんな風景はわたしの隣に広がっていたのだと思います。が、少しずつ市街化は進んでいたのです。

ある日のことです。何かのついでに久しぶりに畦道を歩いていた自分は、ふいに一本の道にぶつかった。蓮田や葦原ばかりだったはずのところに、道ができていたのです。バイパスを通すということで、市街地をはずし、低地を埋め立て、まっすぐに走らせる。市の発展をかけた、当時としては最新の道だったようです。蓮の葉や、足下の泥ばかり見ながら歩いていた自分の眼は、突然にアスファルトの黒い直線につかまり、その上に引かれた白い線に止まりました。道の上によじ登り、アーケ灯の銀色のポールが規則的に遠ざかっていくのを見やりました。工事が完了したばかりだったのか、アスファルトのにおいが強く残っています。まだ車には解放されてなく、人ひとり見あたりません。ゆっくりと雲の行く空の下に、まっすぐに続いていくもの。眩しい「それ」を前にして、しばらく立ち尽くしました。不意に体が震えだし、手のひらで撫でさすりました。そこにあるものが理解できない。それでも、混乱した頭に、懐かしいような妙な感じが湧き出し、溢れ、それが体を包んだように感じました。その場にうずくまったわたしは、陽が傾き、遠くの街の上にかかるまで、動けなかったのを憶えています。その日以降、よくわからないながらも、その場所へ、道の上へ毎日のように出かけました。ワクワクしながら自転車のペダルを踏み、まわりを眺めては、その上での行ったり来たりを繰り返しました。バイパスは、街の期待通りに機能したようです。たちまち、道の両側の湿地は埋め立てられ、建物が建ち並び、生活が溢れかえった。コンクリートで縁どられたたんぼや蓮池は干からび、緑の勢いを失っていきました。それと同じように、この場所にあった不思議な「感じ」もどんどん薄れていきました。⁶⁾

それ以降、わたしはぷつぷつと森をめざすことをしなくなります。この体を震わせるような

衝撃、わたしを包み込んだ懐かしいような遙かな気分。この出来事以来「それ」は頭の内のある部分に座り、少しずつ大きくなりました。大学に進んでも、ますます広がるのです。そしてとうとう、それを積極的に追求め、関ってみようと思いつ日が来ます。わたしの若い日々の転換点だったと思います。

ここで話は少し寄り道をします。数年前、以前から読もうと思いつつ、その膨大さからなかなか手にすることができなかった小説を読み始めました。

母は、「プチット・マドレーヌ」と呼ばれるずんぐりしたお菓子、まるで帆立貝の筋のはいった貝殻で型をとったように見えるお菓子の一つ、持ってこさせた。少したって、陰気に過ごしたその一日と、明日もまた物悲しい一日であろうという予想とに気を減入らせながら、私は何気なく、お茶に浸してやわらかくなったひと切れのマドレーヌごと、ひと匙の紅茶をすくって口に持っていった。ところが、お菓子のかけらの混じったそのひと口のお茶が口の裏にふれたとたんに、私は自分の内部で異常なことが進行しつつあるのに気づいて、びくっとした。素晴らしい快感、孤立した、原因不明の快感が、私のうちにはいりこんでいたのだ。⁷⁾

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』、第一篇『スワン家の方へ』の最初からちょっと行った辺りに登場するエピソードです。主人公である「私」は、これが何なのか思い悩むのですが、とうとう、

そのとき一気に、思い出があらわれた。この味、それは昔コンブレーで日曜の朝（それというのも日曜日には、ミサの時間まで外出しなかったからだ）、レオニ叔母の部屋に行っておはようございますを言うと、叔母が紅茶か菩提樹のお茶に浸してさし出してくれた小さなマドレーヌの味だった。⁸⁾

ということを思い出し、

そして、ちょうど日本人の玩具で、水を満たした瀬戸物の茶碗に小さな紙きれを浸すと、それまで区別のつかなかったその紙が、ちょっと水につけられただけでたちまち伸び広がり、ねじれ、色がつき、それぞれ形が異なって、はっきり花や家や人間だと分かるようになってゆくものがあるが、それと同じに今や家の庭にあるすべての花、スワン氏の庭園の花、ヴィヴォンヌ川の睡蓮、善良な村人たちとそのささやかな住居、教会、全コンブレーとその周辺、これらすべてががっしりと形をなし、町も庭も、私の一杯のお茶からとび出してきたのだ。⁹⁾

と結んでいます。

かつてのあの感じがここに書かれているのに出会います。見事に文章化されこちらに伝わってきます。驚きました。そして、大きな喜びを感じました。小説はここから本編に入っていく

のですが、むさぼるようにして全七篇を一気に読み上げることになりました。読み終えたとき、若い時分にこれを読んでいたら、わたしはどういう人生を送ることになったのだろうとさえ思ったのです。ここにある、失われていた記憶が瞬時によみがえり、一種の歓喜として体を包む現象を、ブルーストは「レミニサンス＝無意志的記憶」と呼び、その瞬間的な想起にこの小説における重要な役割を与えています。そして、その想起のきっかけとなる二つのものの指し示しあう関連を、例えばこの場合はマドレーヌとコンプレーの関係でしょうか、「シーニュ」と呼んでいます。こうしたシーニュが『失われた時を求めて』全編のいたるところに配されており、最終篇『見出された時』において、そこから次々と啓示を得た主人公「私」は、芸術作品を創造することこそ真実を捉える方法であると悟ります。このことを受け、翻訳者である鈴木道彦は「この作品は、語り手が文学の意味と主題を発見する物語と言える。」とまで述べています。¹⁰⁾

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズに『ブルーストとシーニュ』という大変興味深い書物があります。その中でドゥルーズはブルーストの作品を、シーニュの習得に関わる物語であるとしています。そしてそれをいくつかの領域、社交界のシーニュ・愛のシーニュ・感覚的シーニュ・芸術のシーニュに分類し、段階として分析して、芸術のシーニュが他のあらゆるシーニュに勝っており、それだけが非物質的であると述べていきます。

芸術の世界は、シーニュの究極の世界である。そして、非物質化されたものとしてこれらのシーニュは、観念の本質の中にその意味を見出す。そこで、啓示された芸術の世界は、他のすべてのもの、特に感覚的なシーニュに対して反応する。芸術の世界は感覚的なシーニュを統合し、美的な意味で色どり、それらのシーニュの中にまだあった半透明なものの中に浸透する。¹¹⁾

また、感覚的なシーニュにおける無意志的記憶の想起については次のように述べています。この言葉は、わたしの「懐かしいような遙かな気分」に対しても説明を与えてくれているように思われます。

それによってわれわれが再び見出すのは、失われた時間そのものである。それは、すでに拡がり、展開された時間の中に、突然に現れてくる。この経過する時間の中に、本質は展開の中心を再び見出す、それはもはや根原的な時間のイメージにすぎない。無意志的な記憶による啓示が、異常なほど短く、それが長くなればわれわれに害をもたらさざるをえないのはそのためである。われわれは、《眠りかかったとき、言いようのない光景を前にして時折体験するのに似た不安な茫然とした状態の中に》ある。想起は、純粋な過去、過去それ自体としての存在をわれわれに与える。恐らく、過去のこのそれ自体としての存在は、時間のあらゆる経験的な諸次元を超えるものであろう。(中略)この純粋な過去は、経過して行くいかなる現在にも還元されない瞬間的時間であるとともに、あらゆる現在を経過させ、その経過を支配するような瞬間的時間でもある。その意味において、純粋な過去は残存と無との矛盾を、なおも含んでいる。言いようのない光景は、両者の混合からで

きている。無意志的な記憶はわれわれに永遠を与えるが、それは一瞬たりともわれわれがその永遠を支える力を持たず、その永遠の性質を発見する手段を持たないようなやり方によってである。したがって、無意志的な記憶によってわれわれに与えられるものは、むしろ永遠についての瞬間的なイメージである。¹²⁾

このことから考えると、今のわたしと関係を持たない現在の薊野の森に立ってみても意味のないことなのでした。せいぜい子どもの自分と今の自分との間の時間のずれを確かめるだけのことであり、その場所に憶えがあるとしても、そこに記憶の内の時間の断片があるはずもない。見知らぬ場所に立つのとあまり変わらないのかもしれないのです。よみがえる時間は、今の自分の時間の上に、今の自分の眼前の出来事を契機として突然に現れるのです。

連続していた沼や森の、水や光の記憶の空間を、一瞬で切り裂いたように見えたバイパスの上に溢れていた空気、感じ、気分。「それ」としか呼びようの無かったものは、わたしを大きく揺るがしました。そして、それを追い求めることで、わたしの作る何かが「それ」に満ちた空間を備えることを願うことで、とうとう美術の世界に来てしまいました。



なにやら、話はばらばらのまま深みに向かい、抜き差しならない状況に陥りそうです。思いを広げるのはこの位にして、冒頭の環境共生園の北端の林に戻らなくてはなりません。この庭＝人工の森を取り巻く現在の状況に話を戻します。

「景観十年、風景百年、風土千年」という格言がある。それは、作る時の話。破壊する時は、計算はどうなるかという、答えはだいぶ簡単になる。いずれの場合も、一日で十分というわけなのだから。¹³⁾

これは、オギュスタン・ベルクが、3月11日の東北地方災禍以降の日本に寄せたメッセージの書き出しなのです。その中でベルクは和辻哲郎による風土性の定義「人間存在の構造契機」にふれながら、風土は歴史の肉体化であるとし、

歴史性・風土性の趣を絶つということは、過去の教えを無視することに限らない。未来をも無視するということだ。¹⁴⁾

と述べて、現在の人の意識や倫理、行動様式の問題を指摘し、現在ある資本主義・個人主義の在り方を問うことになります。今日の日本人の耳には、痛く辛い提言であります。

先にふれた、落ち葉をゴミと見る日常的な判断も、大きく見ればこの在り方に裏打ちされているのだと思います。そういった我々の現状に思いをやったとき、この環境共生園というささやかな森の先行きは、決して楽観できるものではありません。この10数年の間に、様々な人の手がここに加わり、なんとかバランスを保ちつつ今に至っている実在の空間であるといえども、現在の社会-共同体に備わる、空間をすべてコントロールし意のままに操りたいという、もしかしたら人間存在そのものに由来するのではないかとも思える攻撃性に類するものを前にしたとき、大きな流れに逆行して進んでいる小舟なのだと思うざるを得ません。が、それだからこそ、このできたてほやほやの森のようなものが、今のわたしに対してアクチュアリティを持ち、現存するものとしての有効性を保つのだと考えます。この後も、何らかの形で、シーニュに満ちた、流動的で、ひとつの意味に回収されない空間-事実性として、訳のわからないもので在り続けてほしいと、切に願うものです。

高知駅のプラットホームをゆっくりと離れた列車の車窓から、夕暮れの市街に目をやります。まもなくわたしが子ども時代を過ごした辺りにさしかかります。そこの踏切に立つと、薄暗くなってきた沼地に単線の鉄路が走り、信号機の単調な音の向こうを黒い列車が車体を軋ませて遠ざかっていきました。今は高架になり、周辺の風景もすっかり変わっています。以前、比島山があった場所には大きなマンションが西陽に映えています。建物の表面を覆う茶色のタイルが、直線の集合物として眩しい光を反射しているのですが、それが全体として、かつてあった森の形をしているのです。



註

- 1) 四手井 綱英「土の中の生物」『もりやはやし 日本森林誌』筑摩書房（2009）pp.205-207.
- 2) 同上書 p.207.
- 3) 2009年度2010年度の環境共生園での作庭はそれぞれ、岩村伸一「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について（4）」『環境教育研究年報 第18号』京都教育大学（2010）、橋本侑佳・岩村伸一「作庭実習「森をつくる」11 環境共生園2010」『環境教育研究年報 第19号』京都教育大学（2011）を参照してください。
- 4) 岩村伸一「作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について（1）」『環境教育研究年報 第15号』京都教育大学（2007）p.89.
- 5) 岩村伸一「作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について（1）」『環境教育研究年報 第15号』京都教育大学（2007）pp.85-86、岩村伸一「作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について（3）」『環境教育研究年報 第17号』京都教育大学（2009）pp.121-122、岩村伸一「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について（4）」『環境教育研究年報 第18号』京都教育大学（2010）pp.24-25. など。
- 6) 岩村伸一「作業の実際 あるいは「それ」について」『美術教育研究誌 美と育 no.6』上越教育大学（2001）pp.24-25.
- 7) マルセル・ブルースト 鈴木道彦訳『失われた時を求めて 第一篇 スワン家の方へ I』集英社（2006）p.108.
- 8) 同上書 p.112.
- 9) 同上書 p.114.
- 10) 鈴木道彦「ブルースト『失われた時を求めて』を読む」『カルチャーラジオ 文学の世界』NHK（2009）p.23.
- 11) ジル・ドゥルーズ 宇波 彰訳『ブルーストとシーニュ（増補版）文学機械としての『失われた時を求めて』』法政大学出版局（1986）p.16.
- 12) 同上書 pp.77-78.
- 13) オギュスタン・ベルク「日本の風土を再建することが考えられるか？」『建築雑誌 12月号』（2011）p.12.
- 14) 同上書 p.13.